



「こんにちは 市長です」

3月15日号

「梅一輪一輪ほどの暖かさ」(服部嵐雪)。先月の末、急に寒さが和らいだ。耳を澄ますと、小川のせせらぎは立ち始めた草ぐさに寄り添うように静かに流れる。くすんだ色のざるを土手に置き、鎌をセリの赤みがかかった根に当てる。春の香りがする。そんな光景は今、見ることはなくなった。懐かしい時代である。戦後は誰もが豊かでなかった。けれども不幸せだと思ったことはなかった。時は移り、そんなのどかな風景は見られなくなった。

先日、板倉町長と前橋で会った。「いやー、すごいね」企業が国道122号から太田桐生IC周辺に林立しているからである。IC周辺には大型の企業群、足利寄りには東部工業団地が。そして桐生に向かって流通団地、新しく建設されたおおた渡良瀬産業団地、リサーチパークと続く。国道50号は足利から桐生まで企業がびっしりと埋まった。「いつの間にできたのか？」久しぶりに訪れた人は太田の新しい力に驚く。活力を感じるのだ。地主さんたちの理解があって、行政がお膳立てをして進出企業がまちを変えている。企業進出の意義は雇用、働く場が近くにあることは幸せなことだ。先月末に市外の山あいにある、おいしいとうわさのそば屋に行った。道すがら、動きを止めている集落を見た。桃の花が色づき、景色が良くて空気はきれいだ。でも、やっぱり太田がいい。まちが動いている。

まちを変えていくには再開発(まちのつくり直し)だけでなく、田んぼを市街化編入することも有効な手法である。工場や営業所を誘致すれば数百人の雇用につながる。雇用はまちを躍動させる。しかし、農地法がその流れを拒む。

(3/2記)